

かなでほんちゅうしんぐら

仮名手本忠臣蔵

〔解説〕

寛延元年（一七四八）八月、竹本座初演。竹田出雲・三好松洛（しょうらく）・並木千柳（なみきせんりゅう）の合作。八月十四日から十一月まで打ち続ける程、当初から人気が高かった。言うまでもなく赤穂浪士の仇討ちを脚色したもので、同じ題材を扱った数多くの先行作品の集大成であり、「菅原伝授手習鑑」「義経千本桜」と共に三大浄瑠璃の一つに数えられている。

元禄十四年（一七〇一）三月十四日、勅使響応の際、江戸城松の廊下で、浅野内匠頭が吉良上野介を刃傷に及んだ事件から、元禄十五年十二月十四日の討入りまでを一年に凝縮し、春夏秋冬に配列したのも心憎い脚色である。時代を足利時代に、場所を鎌倉に置き換え、登場人物も、浅野内匠頭を塩治（えんや）判官、吉良上野介を高師直（もろのう）、大石内蔵助を大星由良之助（ゆらのすけ）などと、太平記の世界をとってつけており、また、それは幕府の検閲を逃れるための手段でもあった。

本筋の義士劇の他に、若狭之助、本蔵、勘平、天河屋（あまかわや）の件が発生し、世話場・道行等を交え、もっぱら首尾を整えている。討入りの事実と戯曲的内容を巧妙に一致させた名曲である。

〔あらすじ〕

《大序》暦応元年（一三三八）二月下旬、鶴ヶ丘八幡宮の造営が成就したので、足利將軍尊氏の弟・直義（ただよし）は、兄の代参として鎌倉へ下向、新田義貞が討死の時に着用していた兜を宝蔵に納めることになった。塩冶判官の妻、顔世が召され、四十七の兜のうちより、義貞のものを見分ける。直義と、このたびの響応役、塩冶判官・桃井若狭之助は、兜を宝蔵に納めに行く。後に残った指南役、高師直は、艶書を渡して顔世を口説くが、戻ってきた若狭之助の機転により、顔世はその場を逃れることができた。怒った師直は若狭之助を罵倒、若狭之助はかろうじて憤りを抑える。

《三段目》正七つ時（午前四時）の登城に先がけ、西の御門で師直に追いついた本蔵は、進物を山と並べて首尾よく師直の機嫌を取り結ぶ。師直の勧めで本蔵も門内に入る。やや遅れて、塩冶判官が早野勘平を供に登城。腰元おかるは、顔世から師直への文箱を届けに来る。勘平は判官から師直に渡せばよいと、おかるを待たせて奥に入る。「おのれ師直、真一つ」と意気こむ若狭之助の前に現れた師直は、前日とはうって変わって低姿勢。金が言わせた追従とは夢にも知らぬ若狭之助は、すっかり拍子抜けして、刀を抜くことができない。判官がやってきて顔世からの文箱を師直に手渡すと、中には新古今の歌。師直は恋のかなわぬしと悟り、判官に散々当てこすり言う。判官は腹にすえかね、師直に斬りつけてしまうが、本蔵に抱きとめられる。

《五段目》山崎で獵師をしながら帰参の時機を待っていた勘平は、夜の街道筋で朋輩千崎弥五郎に出会い、主君

の石塔建立の計画を聞き、御用金を調える事を約して別れた。百姓与市兵衛は娘おかるを祇園へ売る約束をして得た半金五十両を懐にしての帰途、斧九太夫の倅、定九郎に金を奪われ、刺し殺される。そこに猪が通りかかり、それを狙った鉄砲が定九郎のあばらを貫いた。勘平は猪を打ちとめたと暗がりを手で探るとそれは人間であった。手に触れた財布を天の与えと押しただき、千崎に届けようと後を追った。

《六段目》勘平が家に帰ると、祇園町から一文字才兵衛がおかるを迎えに来ていた。自分のために遊女となる女房と両親の志を有難く思ったが、舅の与市兵衛はまだ帰らず、その時借りたという財布が、昨夜の旅人のものと同じなので勘平は苦悶した。おかるは別れを惜しんで連れて行かれる。

〔勘平腹切の段〕そこへ獵人仲間が与市兵衛の死骸をかつぎこんできた。勘平が驚く様子もないので、もしやと思ひ、母は色々と尋ね、懐に手を入れると、血の付いた財布が出る。勘平は返す言葉もなく畳に伏して泣いた。そこへ原郷右衛門と千崎弥五郎が、主君に不忠をした者の金は使えないと、石塔料を返しに来た。母は天罰であると二人に舅殺しを訴えた。たまりかねた勘平は腹に刀を突き立て、ゆうべの事情を物語る。しかし、死骸を調べると鉄砲傷はなく、結果的に勘平は定九郎を撃って、親の仇討ちをしたことがわかる。勘平は徒党の連判に加えられる、血判して息絶える。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承下さい。

勘平腹切の段

知つたる折こそあれ。

深編笠の侍二人、

「早野勘平在宿をし召さるゝか、原郷右衛門、千崎弥五郎、御意得たし」

と訪へば、折悪けれども勘平は、腰ふさぎ脇挟んで出で迎ひ、

「これはく御両所共に見苦しきあばら家へ御出で、忝なし」

と、頭を下ぐれば郷右衛門、

「見れば家内に取り込みもあるさうな」

「ア、イヤ、もう些細な内証事。御構ひなくともいざまづあれへ」

「然らば左様に致さん」

と、ずつと通り座に着けば。二人が前に両手を付き、

「この度、殿の御大事に外れたるは拙者が重々の誤り、

申し開かん詞もなし。何卒某それがしが科御許しを蒙り、亡君

の御年忌、諸家中諸共相勤むる様に、御両所の御取り成

し、偏ひとへに頼み奉る」

と、身をへり下り述べければ。郷右衛門取りあへず、

「まづもつてその方、貯へなき浪人の身として、多くの

金子きんす御石碑料に調進せられし段、由良助殿甚だ感じ入

られしが、石碑を営むは亡君の御菩提、殿に不忠不義を

せしその方の金子を以て、御石碑料に用ひられんは、御

尊霊の御心にも叶ふまじとあつて、ナソレ金子は封の

儘相戻さるゝ」

と、詞の中より弥五郎懐中より金取り出だし、勘平が前に差し置けば、『ハッ』とばかりに氣も顛倒てんどう、母は涙と

諸共に、

「コリヤこゝな悪人面、今といふ今、親の罰思ひ知つたか。ハイ、皆様も聞いて下さりませ。親仁殿が年寄つて後生の事は思はず、婿の為に娘を売り、金調へて戻らしやるを待ち伏せして、ア、アレあの様に殺して取つた金ぢやもの、天道様がなくば知らず、何で御用に立つものぞ。親殺しの生き盗人に罰を当てゝ下されぬは、神や仏も聞こえませぬ。あの不孝者、御前方の手に掛けて、なぶり殺しにして下され。わしや腹が立つわいの」

と、身を投げ伏して泣きぬたる。聞くに驚き兩人刀追つ取つて弓手馬手に詰め掛け詰め掛け、弥五郎声を荒らげ、

「ヤイ勘平、非義非道の金取つて身の科の詫びせよと言はぬぞよ。わが様な人非人、武士の道は耳にも入るまい、親同然の舅を殺し、金を盗んだ重罪人は大身槍の田楽刺し、拙者が手料理振舞はん」

と、はつたと睨めば郷右衛門、

「渴しても盗泉の水を飲まずとは義者の戒め。舅を殺し取つたる金、亡君の御用金になるべきか。生得汝が不忠不義の根性にて、調へたる金と推察あつて、突き戻されたる由良助殿の眼力、ハ、天晴れ／＼。さりながら、ハア情けなきはこの事世上に流布あつて、塩谷判官の家来早野勘平、非義非道を行ひしといはゞ、汝ばかりが恥ならず、亡君の御恥辱と知らざるか。こな／＼、こな／＼、うつけ者めが。勘平、コレサ勘平、御身はどうしたものだ。左程の事の弁へなき、汝にてはなかりしが、いかなる天魔が魅入りし」

と、鋭き眼に涙を浮かめ、事を分け理を責むれば、堪り兼ねて勘平諸肌押し脱ぎ脇差を、抜くより早く腹へぐつと突き立て、

「ム、いづれもの手前面目もなき仕合はせ、拙者が望み

叶はぬ時は切腹と兼ねての覚悟、わが、わが舅を殺せし事、亡君の御恥辱とあらば一通り申し開かん、兩人共にまづ、まづく、まづくく聞いてたべ。夜前弥五郎殿の御目に掛かり、別れて帰る暗紛れ、山越す猪しに出合ひ、二つ玉にて撃ち留め、駆け寄つて探り見れば、猪にはあらで旅人、南無三宝誤つたり。葉はなきかと懷中を探し見れば、財布に入つたるこの金。道ならぬ事なれども、天より我に与ふる金とすぐに馳せ行き、弥五郎殿にかの金を渡し、立ち帰つて様子を聞けば、撃ち止めたるは、撃ち止めたるは、わが舅。金は女房を売つた金、か程迄する事なす事、いすかの嘴程はし違ふといふも、武運に尽きたる勘平が、身の成り行き推量あれ」

と、血走る眼に無念の涙。子細を聞くより弥五郎ずんど立ち上り、死骸引き上げ打返し、『ムウ、ム』と疵口改め、

「郷右衛門殿これ見られよ、鉄砲疵には似たれどもこれは刀で抉えぐつた疵。勘平早まりし」

と、言ふに手負も見てびつくり、母も驚くばかりなり。

郷右衛門心付き、

「イヤコレ千崎殿、ア、これにて思ひ当つたり。御自分も見られし通り、これへ来る道端に鉄砲受けたる旅人の死骸、立ち寄り見れば斧定九郎。強欲な親九太夫さへ、見限つて勘当したる悪党者。身の佇たたずみなき故に、山賊すると聞いたるが、疑ひもなく勘平が、舅を討つたは彼奴きやつが業」

「エ、そんなりやアノ親仁殿を殺したは、他の者でござりまするか。ハア」

『ハツ』と母は手負に縋り、

「コレ、手を合はして拝んます。年寄りの愚痴な心から恨み言ふたは皆誤り、堪へて下され勘平殿、必ず死んで

下さるな」

と泣き詫ぶれば、顔振り上げ、

「只今、母の疑ひもわが悪名も晴れたれば、これを冥途の思ひ出とし、後より追付き舅殿、死出三途を伴はん」

と、突込む刀引廻せば、

「ア、暫く〜。思はずもその方が舅の敵討つたるは、未だ武運に尽きざるところ。弓矢神の御恵みにて、一功立つたる勘平、息のあるうち郷右衛門が、密かに見する物あり」

と、懐中より一巻を取り出だし、さらさらと押し開き、

「この度、亡君の敵高師直を討ち取らんと神文を取り交し、一味徒党の連判かくの如し」

と、読みも終らず苦痛の勘平、

「シテその姓名は、誰々なるぞ」

「オ、徒党の人数は四十五人、汝が心底見届けたれば、

その方を差し加へ一味の義士四十六人。これを冥途の土産にせよ」

と、懐中の矢立取り出だし姓名を書き記し、

「勘平、血判」

「オ、心得たり」

と、腹十文字に掻き切り、臓腑を掴んでしつかと押し、

「サ血判、仕つた」

「ア、コリヤ乗るな〜。早野勘平繁氏、血判確かに相済んだぞ」

「チエ、忝なや有難や。わが望み達したり。母人、嘆いて下さるな。舅の最期も女房の奉公も、反古にはならぬこの金、一味徒党の御用金」

と、言ふに母も涙ながら、財布と共に二包み、二人が前に差し出だし。

「勘平殿の魂の入つたこの財布、婿殿ぢやと思つて敵

討の御供に連れてござつて下さりませ」

「オ、成程、尤もなり」

と、郷右衛門金取り納め、

「思へば思へばこの金は、縞の財布の紫摩^{しま}黄金、仏果を得よ」

と言ひければ、

「ヤア仏果とは穢らはし、死なぬ〜。魂魄この土に留まつて、敵討ちの御供する」

と、言ふ声も早四苦八苦、『惜しや不憫』と兩人が、浮む涙の玉の緒も、切れてはかなくなりにつけり。

「ヤア、ヤア〜、もう婿殿は死なしやつたか。さても〜世の中に、俺が様な因果な者が又と一人あらうか。

親仁殿は死なつしやる、頼みに思ふ婿を先立て、いとし可愛い娘には生き別れ、年寄つたこの母が一人残つてこれがマア、何と生きてゐられうぞ。コレ親仁殿、与

市兵衛殿、俺も一緒に連れて往て下され」

と、取り付いては泣き叫び、また立ち上つて、

「ア、コレ婿殿、母も共に」

と、継り付いては伏し沈み、あちらでは泣きこちらでは『わつ』とばかりにどうど伏し、声をはかりに嘆きは、目も当てられぬ次第なり。郷右衛門突立ち上がり、

「これ〜老母、嘆かるゝは理りなれども、勘平が最期の様子、大星殿に詳しく語り、入用金手渡しせば満足あらん。首に掛けたるこの金は、婿と舅^{ななぬか}の七七^{ななぬか}日。四十九日や五十両、合はせて百両百ヶ日の追善供養、後懇ろに弔はれよ。さらば〜」

「おさらば」

と、見送る涙見返る涙、涙の浪の立ち帰る、人もはななき次第なり。